

口語法分布圖ニ關スル注意及ビ分布圖目錄



## 口語法分布圖製圖方針

- 一、今回ノ口語法取調ニ關スル事項三十八箇條ハ曩ニ出版シタル音韻分布圖ニ於ケルガ如ク逐條作圖スルニ適セズ依テ多クハ一箇條所載ノ事項ヲ若干ニ分チ、之ニ就キテ分布圖大凡九十枚ヲ作リタリ
- 二、右大凡九十枚ノ分布圖ノ中、大同小異ニシテ一ヲ以テ他ヲ推シ得ベキモノハ之ヲ除キ最モ特徴ヲ有シ標準語法制定上及ビ國語學上ノ參考トシテ必要ナルモノ三十七枚ヲ選ビテ出版スルコトトセリ
- 三、分布圖ハ專ラ簡明ヲ主トシ語法及ビ其發音ニ就キテハ綜合概括シテ調製シタルモノ多シ例ヘバ「ウケベ」<sup>ト</sup>「ウケルベ」<sup>ト</sup>「ウクベ」<sup>ト</sup>（第二圖）ノ如ク、其圖面ニ於テ主要ナラザル語法上ノ區別、「ベ」<sup>ト</sup>「べ」<sup>ト</sup>「ペ」<sup>ト</sup>（未來ノ云ヒ方ノ分布圖）ノ如キ長短清濁ノ變化等ハ皆之ヲ一括シテ表ハシタリ
- 四、分布圖一枚ニ收メンニハ繁雜ヲ來スベキ恐アルモノハ之ヲ二三枚ニ分チテ製圖セリ、例ヘバ「せられる」<sup>ト</sup>「せらるゝ」<sup>ト</sup>「しられる」<sup>ト</sup>「しらるゝ」<sup>ト</sup>「される」<sup>ト</sup>「さるゝ」<sup>ト</sup>ノ分布ヲ示スニ當リテ一圖（第二十六圖）ニ於テ其上半ナル「せら」<sup>ト</sup>「しら」<sup>ト</sup>「さ」<sup>ト</sup>ノ分布ヲ示シ、他圖（第二十圖）ニ於テ其下半ナル「れる」<sup>ト</sup>「るゝ」<sup>ト</sup>ヲ示シタリ
- 五、一地方ニ於テ社會、職業、教育ノ相違或ハ崇敬ノ程度等ニ依リテ異例ヲ存スルモノハ場合ニヨリテ其大體ヲ表ハシ或ハ全ク圖中ヨリ省キタリ
- 六、語ノ異同ニ依リテ語法上多少ノ差異アル場合アリトイヘドモ圖中ニ於テハ多クハ概要ニ從ヒタリ
- 七、地圖小ナルガ爲メ郡市及ビ其他ノ區域ノ位置ヲ正確ニ表ハスコト能ハザルモノアリ
- 八、調査報告不著若クハ不明ナル時ハ其地方ニ著色セズ姑ク遺漏ノマ、ニ存シタリ但シ報告稍々明瞭ヲ缺クト雖モ傍例ニ依リテ類推シ得ルモノ或ハ斯クナルベシト信ゼラル、根據アルモノ等ハ之ニ著色シタリ
- 九、佐渡、小豆島、天草等ノ如ク特ニ其島ニ關スル報告アル場合ノ外ハ島嶼ニハ著色セズ又沖繩縣下ノ諸島ハ凡テ著色セズ
- 十、郡村等ノ言語近隣相異ナルコト著シキ場合ニ此狹小ナル地圖面ニ於テハ到底明瞭ナラシメ難ク却テ混雜ヲ招ク恐アルガ故ニ止ヲ得ズ省略ニ從ヒタルモノ多シ
- 十一、一地方ニシテ數種ノ報告アル場合ニハ或ハ多數ノ一致ス

ル所ニ從ヒ或ハ比較的ニ信用スベキモノト認メタルモノニ從ヒテ製圖シタリ

十二、一縣ニ於テ部分的報告ト概括的報告ト兩ナガラ存スル時ハ主トシテ前者ニ據リテ製圖シタリ

十三、報告中ニ『何々といふ處あり』ト記シタルモノハ其地方何處ナルカ明ナラズ又『稀にいふ』ト記シタルモノハ圖上ニ明示シ難シ、故ニ此等ハ概ネ省キタリ

十四、地圖ニ著色スルニ就キテハ大體左ノ如キ方針ヲ以テシタレドモ一方ニハ語ノ異同甚ダ多ク一方ニハ甚シク色彩ニ制限ヲ受ケタルガ爲メニ止ヲ得ズ或ハ色ヲ減ジ或ハ便宜豫定ノ方針ヲ變更スルニ至リシコト多シ、尙ホ語ノ異同頗ル繁雜ニシテ色彩ニヨリ之ヲ明瞭ニ表示シ能ハザルモノハ止ヲ得ズ省略シタルモノ多シ

口語法分布圖目錄

○未來ノ云ヒ方

- 一、書から、書くべい、書かず(四段活用ノ語)等ノ分布圖
- 二、受けよう、受けら、受けべい、受けず(下二段活用ノ語)等ノ分布圖
- 三、來ら、來よう、來べい、來らず等ノ分布圖

- (イ) 色彩ノ配置ハ語ノ分布ヲ一目瞭然ナラシムルコト
- (ロ) 同類ノ語ヲ表ハスニハ成ルベク同類ノ色彩ヲ用キ異類ノ語ヲ表ハスニハ成ルベク異類ノ色彩ヲ用キルコト
- (ハ) 同類ノ語中ニテ彼此異同アルモノハ或ハ縦線或ハ横線或ハ斜線ヲ以テ之ヲ區別スルコト
- (ニ) 二種以上ノ異類ノ語ヲ用キルコトヲ表ハスニハ二色ヲ混和スルヲ原則トシ混和ノ結果ノ佳ナラザル場合ニハ或ハ一色ヲ横線ニシテ他色ノ上ニ重ネ或ハ一色ヲ横線ニシ他色ヲ縦線ニシテ二者ヲ重ネ或ハ一色ヲ太キ線ニシ他色ヲ細キ線ニシテ之ヲ重ナル等便宜ノ方法ヲ取ルコト
- (ホ) 國語變遷上ソノ原形ニ近シト見ユルモノニハ青ヲ用キソノ轉訛シタルモノニハ他色(例へバ黃樺等)ヲ用キルコト

四、爲よう、爲ら、爲べい、爲ず等ノ分布圖

○打消ノ云ヒ方

- 五、ぬ、ない等ノ分布圖
- 六、來ぬ、來ない等ノ分布圖
- 七、爲ぬ、爲ない等ノ分布圖

八、なんだ、なかつた等ノ分布圖

二十三、飲んだ、遊んだ、飲うた、遊うた(麻行婆行四段活用)

三、來<sup>コ</sup>う、來<sup>キ</sup>よう、來<sup>キ</sup>べし、來<sup>コ</sup>うず等ノ分布圖

七、爲<sup>セ</sup>ぬ、爲<sup>シ</sup>ない等ノ分布圖

八、なんだ、なかつた等ノ分布圖

九、いで、ないで等ノ分布圖

十、せねば、しなければ等ノ分布圖

十一、來<sup>コ</sup>まい、來<sup>キ</sup>まい、來<sup>キ</sup>まい等ノ分布圖

十二、爲<sup>ス</sup>まい、爲<sup>セ</sup>まい、爲<sup>シ</sup>まい等ノ分布圖

○命令ノ云ヒ方

十三、見<sup>ル</sup>よ、見<sup>イ</sup>い、見<sup>ル</sup>ろ(上一段活用ノ語)等ノ分布圖

十四、受<sup>ケ</sup>よ、受<sup>ケ</sup>い、受<sup>ケ</sup>ろ(下二段活用ノ語)等ノ分布圖

十五、來<sup>コ</sup>よ、來<sup>コ</sup>い等ノ分布圖

十六、爲<sup>セ</sup>よ、爲<sup>セ</sup>い、爲<sup>ス</sup>ろ等ノ分布圖

十七、れよ、られよ、れる、られる(受身助動詞)等ノ分布圖

○條件ノ云ヒ方

十八、條件ノ云ヒ方ノ分布圖

○指定ノ云ヒ方

十九、だ、ぢや、や等ノ分布圖

二十、です、どす、だす等ノ分布圖

○活用ノ形

二十一、出した、出いた、(佐行四段活用ノ語ノ連用形)等ノ分

布圖

二十二、拂<sup>ツ</sup>た、拂<sup>ウ</sup>た、(波行四段活用ノ語ノ連用形)等ノ分

布圖

二十三、飲<sup>ム</sup>んだ、遊<sup>ブ</sup>んだ、飲<sup>ム</sup>うた、遊<sup>ブ</sup>うた(麻行婆行四段活用

ノ語ノ連用形)等ノ分布圖

二十四、なされた、なすつた、なすつた等ノ分布圖

二十五、なされます、なさります、なさいます等ノ分布圖

二十六、讀<sup>マ</sup>ませた、讀<sup>マ</sup>ました等ノ分布圖

二十七、寒<sup>ク</sup>なる、宜<sup>シ</sup>しくない、寒<sup>ク</sup>なる、宜<sup>シ</sup>しくない等ノ分

布圖

二十八、上二段活用ノ分布圖

二十九、下二段活用ノ分布圖

三十、れる、る(受身、勢相ノ助動詞ノ終止形、連體形)等ノ

分布圖

三十一、させる、さする、さす(使役ノ助動詞ノ終止形、連體

形)等ノ分布圖

三十二、奈行變格活用ノ分布圖

三十三、漢語ヲ動詞ニスル仕方(第一種)ノ分布圖

三十四、漢語ヲ動詞ニスル仕方(第二種)ノ分布圖

三十五、漢語ヲ動詞ニスル仕方(第三種)ノ分布圖

三十六、せられる、しられる、される(名詞又ハ漢語ヲ受身ノ

動詞、勢相ノ動詞ニシタルモノ)等ノ分布圖

三十七、ける、せる、てる、へる、める、れる、ねる、(四段活

用及ビ奈行變格活用ノ動詞ノ受身又ハ勢相ノ形ヲ約メタル

モノノ分布圖

### 口語法分布圖概観

口語法分布圖ハ全國語法分布ノ大勢ヲ示スモノニシテ標準語法制定ノ資料トナリ又曩ニ出版シタル音韻分布圖ト相俟チテ國語變遷ノ研究、言語區域ノ劃定等ニ就キテ有用ナルモノナリ今分布圖ヲ參照シ國語學上ノ要點ニ就キテ簡單ナル説明ヲナシ之ヲ見ン人ノ研究ノ指針ト爲サントス

一、標準語法ハ單ニ云ヒ方ノ分布ノ廣狹ニ依リテノミ取捨ヲ決スベキニハアラザレドモ一地方ニ限レル云ヒ方ハ概シテ採用セラルベキ資格ヲ缺クモノナリ然ルニ茲ニ二種ノ云ヒ方アリテソノ價值殆ンド相同ジクソノ領域モ亦略々相等シキ場合ニ於テハ標準語法トシテ其取捨頗ル困難ナルモノアリ今此二種ノ云ヒ方ヲ口語法分布圖ニ就キテ見ルニ、未來ノ云ヒ方ニ於テ「うけよう」「うけらう」(第二圖)、「こよう」又「さきよう」(第三圖)、「しょう」(第四圖)、「せう」(第四圖)ノ對峙、打消ノ云ヒ方ニ於テ「ない」(第五圖)ヨリ第七圖ニ至ル「なかつた」(第八圖)、「ないで」(第九圖)ノ對峙、命令ノ云ヒ方ニ於テ「ろ」(第十圖)、「よ」(第十一圖)、「う」(第十三圖)ヨリ

第十七圖ニ至ル)ノ對峙、指定ノ云ヒ方ニ於テ「だ」(「ぢや」ト(第十九圖)ノ對峙、活用ノ形ニ於テ「拂つた」(「拂うた」ト(第二十二圖)、「讀ました」(「讀ませた」ト(第二十六圖)、「寒く」(「寒う」ト(第二十七圖)ノ對峙等アリ、而シテ此等ノ對峙ハ略々東西方言ノ特徴ノ對峙ト見得ベキガ如シ

二、標準語法ノ取捨トハ關係稍々薄ケレドモ前項ニ舉ゲタルモノト同ジク東西相異ナル云ヒ方アリ例ヘバ未來ノ云ヒ方ニ於テ「べい」ノ類ヲ云フ地方ト云ハザル地方ト(第一圖ヨリ第四圖ニ至ル)、活用ニ於テ「出した」、「指した」(ナド云フ地方ト「出した」、「指した」(第二十一圖)ノ如キハ略々東西ニ相分ル、モノト云フベシサレバ今前項ニ云ヘル對峙ト本項ニ云フ對峙トニ基キテ假ニ全國ノ言語區域ヲ東西ニ分タントスル時ハ大略越中飛驒美濃三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ、以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ但シ此線ハ實際ニ於テハ斯ク單純ナルモノニアラズ又斯ク判然タルベキモノニアラズ此線ニ沿ヘル左右ノ地方ハ東西ノ方言ノ交錯スル處ニシテ

甚ダ複雑ナル狀態ニ在ルコト勿論ナレバ其境界ヲ比較的

川時代ノ藩主ノ移封ニ基クガ如シ

時、命令ノ云ヒ方ニ於テ「ろ」「ト」「よ」「ト」「い」「ト」(第十三圖ヨリ

此線ニ沿ヘル左右ノ地方ハ東西ノ方言ノ交錯スル處ニシテ

甚ダ複雑ナル状態ニ在ルコト勿論ナレバ其境界ヲ比較的正確ニ劃定スルコトモ猶ホ今日ニ於テハ期スルコト能ハザル所ナリ而シテ今假定シタル境界線ヲ標準トシテ各分布圖ノ上ニ於ケル東西ノ境界ヲ見ルニ多少或ハ東ニ偏シ或ハ西ニ傾キテ東西ノ方言ノ領域互ニ相伸縮スルヲ免レズ

三、前項ノ境界線ハ北陸道方面ニ於テハ概シテ比較的ニ固定ス

ルガ如クナレドモ東海道方面ニ於テハ移動スルコト頗ル多ク尾張三河遠江ノ如キハ屢々其所屬ヲ變ズルコトアリ又東山道方面ニ於テモ多少ノ出入アリテ南信飛騨美濃ノ如キハ或ハ東方ノ領域ニ入り或ハ西方ノ領域ニ入ルコトアリ尙ホ越後信濃甲斐駿河等ノ西方ノ所屬トナリ近畿諸地方ノ東方ノ所屬トナルコトモアリ攷究者宜シク各圖ヲ對照シテ之ヲ知ルベシ然レバ北陸道殊ニ越中及ビ越後、東山道ノ中信濃(殊ニ南信)及ビ美濃、東海道ノ中箱根以西(殊ニ遠江三河尾張)等ハ向後以上ノ見方ヨリノ周密ナル調査ヲ要ス

四、東西ノ區劃ハ固ヨリ大體ニ就キテ云フモノニシテ一方ノ言

語區域ノ内ニモ他方ニ於ケル云ヒ方ヲ爲ス地方アルハ勿論ナリ西方ノ言語區域ニ屬スル中國ノ鳥取、島根ノ兩縣下、九州ノ福岡(筑後)、熊本、佐賀、長崎ノ諸縣下ニ東方ノ方言ヲ用キル處アルコト 命令ノ云ヒ方ノ各分布圖(第十三圖ヨリ第十七圖ニ至ル)等ヲ見テ知ルベシ是ハ主トシテ德

川時代ノ藩主ノ移封ニ基クガ如シ

五、桑名、唐津、延岡ノ如ク關東方言ノ系統ヲ有スル地方等ニ於テハ西方ノ言語區域内ニ在レドモ周圍ノ言語ト孤立シテ所謂「言語ノ島」ヲ成セルガ如キ觀アリ然レドモ此ノ分布圖ニ於テハ調査材料ノ不備ト製圖ノ都合トニ依リテ此ノ如キ地方ヲ明示シ難キコトノ多カリシハ遺憾ナリ

六、以上諸項ニ説ク所ノ見地ニ據リテ仔細ニ各分布圖ヲ觀察セバ大小種々ノ言語區域ヲ劃スルコトヲ得ベク又之ヲ以テ將來ノ調査及ビ攷究ニ資スルコトヲ得ベシ

七、分布圖ハ國語ノ地理的變遷上ヨリ見テ注意スベキ點少カラ

ズ以下二三ノ點ニ就キテ少シク説カシ  
普通ノ見解ヨリシテ古形ニ近シト見ユルモノ又ハ雅馴ニ聞コユルモノ等ハ概シテ西方ノ言語區域ニ在ルコト各圖ニ就キテ見ルヲ得ベシ然レドモ東方ノ言語區域ニ却テ原形ノ存スルコトナキニアラズ例ヘバ西方ニ於テハ「出した」ノ類「寒う」ノ類ノ音便ニ崩レタル形アレドモ東方ニ於テハ全ク之ヲ用キズ原形ノマ、「出した」、「寒く」ト云フガ如シ(第二十一圖、及ビ第二十七圖)此ノ外孰レノ區域ニ在リテモ轉訛シタルモノ散在セルコトアリ又轉訛シタルモノト見ユルモノニシテ却テ原形ニ近シト思ハル、モノアリト雖モ煩ヲ避ケテ今之ヲ明示セズ

八、九州ニハ概シテ古キ形残り他ノ地方ニ普ク行ハル、新シキ形ナキコト多シ四國ノ大部分及ビ中國ノ西部等之ニ次グ上二段活用ノ動詞(第二十八圖)下二段活用ノ動詞(第二十九圖)受身勢相ノ助動詞ノ「る、」(第二十圖)使役ノ助動詞ノ「さする」(第三十一圖)四段活用ノ動詞ノ受身又ハ勢相ノ形ヲ約メテ下一段ニ云フモノ(第三十七圖)等ハ主トシテ九州ニ於テ正シク行ハル、コト後項別ニ説クガ如シ他ノ地方ニ於テハ此等ノ形ハ一般ニ一段ノ活用(連體形終止形ニ就キテ云フ)ニ移リ又之ト相混ズ、漢語ヲ佐行變格ニ活カセテ更ニ或ルモノヲ四段活用又ハ上一段活用ニ轉ズルコトハ他地方ニ於テ一般ニ見ル所ナレドモ九州ニテハ此ノ新シキ云ヒ方ヲ爲サルガ如シ(第三十四圖及ビ第三十五圖)「です」「だす」ノ類ハ九州及ビ四國ノ大部分、中國ノ西部等ニハ行ハレズ(第二十圖)但シ其内一局部ニ於テハ「です」ヲ用キル處モアリ、近畿ニ行ハル、「だす」ヲ用キル處モアリ、又打消ノ過去ノ云ヒ方ニ於テ九州及ビ島根縣等ニテハ「なんだ」「なかつた」ノ孰レモ云ハズ(第八圖)「ざつた」「んだつた」「んぢやつた」ノ類ヲ云フコト多シ

九、九州ニ於ケル云ヒ方ノ、東北若クハ東方言語區域ニ於ケル云ヒ方ト、原形ニ近キモノヲ保存スル點ニ於テ相一致スルコトアリ、第二十六圖ニ於テ「讀ませた」ヲ單用スル地方ヲ

地方多ク又四段活用ニ轉ジ了リタル地方モ少カラズ

見、第三十六圖ニ於テ「せられる」「若クハ「せらる、」ヲ云フ地方ヲ見テ知ルベシ

十、動詞ノ二段ニ活用スルモノハ九州ニ存スル外紀州ノ日高郡ニ殘レリ其ノ中、上二段活用ハ新瀉縣等ニモ一部分ハ上一段活用ノモノト並用セラレテ殘レリ九州ニ於テハ下二段活用ノ正シク殘レル區域ハ其全部ニ涉レルガ如ク上二段活用ノ正シク殘レル區域ハ之ニ比シテ甚ダ狹ク僅ニ其東北一帯ニ偏セルガ如シ(第二十八圖及ビ第二十九圖)受身勢相ノ助動詞ノ「る、」使役ノ助動詞「さする」ノ正シク行ハル、ハ同ジク九州ヲ主トシ、多少混亂シタル姿ニ於テハ四國ノ大部分、中國及ビ近畿ノ一部分ニモ行ハル、但シ「さする」ノ方ハ四國ノ諸地方ニ於テハ正シク行ハル(第三十圖及ビ第三十一圖)尙ホ動詞ノ二段ニ活用スルモノ、分布區域ト併セテ考フベシ

十一、前三項ニ指示シタル所ヲ以テ音韻分布圖第二十七圖(カ、クワ分布圖)第二十八圖(ジ、ヂ分布圖)及ビ第二十九圖(ズ、ヅ分布圖)等ト彼此相照合セテ本邦言語變遷ノ迹ヲ察スルコトヲ得ベシ

十二、奈行變格活用ノ動詞ハ東方言語區域ニ於テハ全ク四段活用ニ轉ジ了リタリ、西方言語區域ニ於テハ或ハ最モ原形ニ近キ姿ニテ殘リ或ハ四段活用作ト混亂シテ其ノ痕跡ヲ保テル

コトアリ、第二十六圖ニ於テ「讀ませた」ヲ單用スル地方ヲ

近キ姿ニテ残り或ハ四段活用ト混亂シテ其ノ痕跡ヲ保テル

地方多ク又四段活用ニ轉ジ了リタル地方モ少カラズ

十三、未來ノ云ヒ方ニ「ず」ヲ用キタル區域（第一圖ヨリ第四圖

ニ至ル）ハ今著シク縮少セリ是ハ二三百年以前ニ於テハ近

畿及ビ九州等ニモ廣ク行ハレタリシモノナルガ現今ハ僅ニ

本邦ノ中部ナル静岡、山梨、愛知、岐阜、長野ノ四縣下ノ

内ニノミ其ノ痕ヲ遺セリ、「飲<sup>○</sup>うだ」「遊<sup>○</sup>うだ」ノ如キ云ヒ方

（第二十二圖）モ亦近畿地方ニハ其跡ヲ絶チ却テ九州四國中

國ノ各一部分及ビ富山縣下ノ小部分ニノミ殘ルニ至レリ

以上ハ暫ク口語法分布圖ニ據リテ觀察ヲ下シ得ベキ點ノ大要ヲ

舉ゲタルモノニシテ、各圖ニ關シテ又ハ各圖ヲ比較シタル上ノ

詳細ナル説明ハ今之ヲ省キタリ見ン人此等諸項ニ於テ指摘シタ

ル所ニ基キテ仔細ニ各分布圖ニ就キテ攷究セバ學術上裨益スル

所少カラザルベシ

